

---

# Return

天中涼介

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

R e t u r n

### 【Nコード】

N 4 0 6 9 B

### 【作者名】

天中涼介

### 【あらすじ】

突然の別れ話に戸惑う恵美。しかし、明義はその理由を言わない。納得しない恵美は・・・。

夕刻の教室は、茜色の光に照らされる。

部活をしている生徒は、まだ一時間は教室に戻ってはこないだろう。

二階の教室にはグラウンドで練習する野球部の声が絶え間無く響いてくる。時折、奇声にも似た叫び声はサッカー部だろうか。それに掻き消えそうな高音は女子テニス部に違いない。

校舎の奥から響くピアノは声楽部、もっと奥からは吹奏楽部のばらばらな和音が漂ってくる。

ひとり、明義<sup>あきよし</sup>は、そんな教室で佇んでいた。

物思いに耽ると廻りの雑音など耳に入らないのか、ただ呆然とするかのように朱色に染まる教室で自分の机に座ったまま身じろぎすらしない。

明義の心は渦巻いていた。悲しみと言うには涙が込み上げるわけではなく、苛立ちと言うには小波のような感情は表現できない。

ただただ、理解出来ない感情の本流に漂うだけだ。

昨日の帰り道、明義<sup>あきよし</sup>は二年近く付き合った彼女、恵美<sup>えみ</sup>に別れを告げた。

色々悩んだ結果の結論で、後悔は無い。いや、無いと言うのは嘘だが、少なくとも間違った選択では無かったと自負している。

恵美<sup>えみ</sup>は納得しなかった。

当然といえる。

明義<sup>あきよし</sup>は、別離の理由を最後まではっきりと言わなかったからだ。ただ別れて欲しいでは、納得のしようもあるまい。恵美<sup>えみ</sup>は当然追求した。

他に好きな人でも出来たか？ それとも、あたしに飽きたのか？

はたまた親にでも反対されたのか？

疑問は発しても明義あきよしは黙して語らない。

重い沈黙の中、耐えられなかったのは恵美えみの方であった。

今にもこぼれそうな涙を振り払うよう踵を返すと、夕闇の小道を駆け去って行った。

その後を見送りながら、明義あきよしの心は揺れていのだった。

実際、明義あきよしの気持ちははつきりとした結論にまでは至っていないのが本当ではないだろうか？だからこそ、この朱色の教室に佇んでいるのではないだろうか？

カララ・・・

ゆっくりと、静かな引き戸の音が響いた。

はつと顔を上げた明義あきよしの眼に、俯き加減に立つ恵美えみが見えた。

「明義・・・はなし・・・してもいいかな？・・・」

遠慮がちと言うより、怖々聞く感じの方が強かったらどうか？

明義あきよしは、答えない。ただ、恵美えみを、感情の無い瞳で見つめている。

「・・・色々・・・考えたんだ・・・でも・・・やっぱり・・・わからないくて・・・」

涙声に近いのか、恵美えみの声は震えているようにも聞こえる。

「そつちで・・・話しても・・・いい？」

言うが早いか恵美えみは明義あきよしの前の椅子に腰掛けた。

「あたしたち、もうすぐ卒業でしょ？このまま、あやふやなままにして別れるなんて・・・嫌なの。明義あきよしの気持ちさが・・・わからないままなんて・・・絶対に嫌！あたしは、変わらず好きよ！明義あきよしがどう考えていようと、それは変わらない！」

明義あきよしは、定まらない焦点の瞳を机の表面に向けたままだ。

「ちゃんと話してよ！このまますっきりしないままで終わっていないの？明義あきよしだけが納得して、あたしにはいい加減な結末にする気なの？」

感情の高ぶりなのか恵美えみの声は震えている。

それでも二度深く息をついて、感情の高ぶりを抑えた。

「あたしのことが嫌いになった？」

静かな恵美の問いかけに、明義は俯き加減のまま首を振った。

「じゃ、あたしより好きな人が出来た？」

かすれて消えそうな声音で恵美が聞くが、それにも明義は首を振った。

「・・・あたしじゃ・・・ダメってこと・・・？」

かぼそく呟くような声は痛々しくもある。それにも、明義は頭を振った。

「じゃあ、なに？ 明義卒業したら東京でしょ？ あたしは、ここに残る・・・」

そこまで言って恵美の言葉は途切れた。

俯いた明義の下、机の表面に大粒の水滴が落ちていたのだ。男泣きと言うには情けない表情だったろう。しかし、止めどなく流れる涙は、固く閉じた明義の瞳から流れ続ける。

「・・・」

恵美は、何も言わずにポンポンと明義の頭を二度ほど叩いて、その後ゆっくりと撫でた。

「・・・ばっかねえ・・・何の心配してるんだか・・・」

泣きそうな表情、いや、薄い微笑み。恵美の表情は泣きじゃくる子供を優しくあやす母のようでもある。

「明義に自信が無くても、あたしには自信もあれば確信もあるよ。ずっと、ずっと、変わらなく好きでいられる。遠恋なんて理由になんないんだから」

後半はクスリと鼻で笑うようなふくみがあった。

短い付き合いではない。恵美には明義の考えていることが理解できた。ただ、突然の別れ話に恵美自身が混乱していただけなのだ。

「ね、チュしてあげようか？」

まだ、泣き止まぬ明義の顔を、下から覗き込む様に恵美が聞く。  
「・・・ごめん・・・」

搾り出すかのような明義あきよしの声は、昨日以来初めて聞く声であった。

廊下をわいわいと喋りながら、部活を終えた生徒がやってくる。  
その中の一人が、声も高らかに言う。

「まいどながら仲がよろしくて、お暑いですなあ!」

冷やかしの言葉は、もうすぐ桜色に染まるのだろうか・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4069b/>

---

Return

2010年10月8日15時27分発行